幼保・小の連携に関する研究（3）
―小牧市における6年間の交流・連携活動の調査より―

横　井　志　保

はじめに

平成18年に改正された教育基本法では、「幼児期の教育」の条が新設され[1)]、学校教育法では幼稚園の重要性、特に義務教育の基礎を培う重要な意味を持つことに着目し、幼稚園は小学校の前に規定された[2)]。今回（2008年3月）改定された幼稚園教育要領では、「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため，幼児と児童の交流の機会を設けたり，小学校の教員との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど，連携を図るようにすること。」が、第3章第1指導計画の作成に当たっての留意事項の2特に留意する事項（5）に加えられた[3)]。このように、幼児教育は大変重要視され、ことに小学校教育へのつながり、幼小連携は幼稚園教育要領の改訂の重要なポイントともなった。

日本保育学会の研究発表では、幼小連携に関する研究は1985年から口頭発表において「幼小関連」として区分が作られ、研究発表がなされてきている[4)]。また、ベネッセ次世代育成研究所による全国的調査が2007年に幼稚園、2008年に保育所を対象になされ、2009年にその報告書が出された。それによると、公立幼稚園の84.5%、私立幼稚園の58.4%、公営保育所の63.6%、私営保育所の66.3%で小学生との交流活動を行っており、教員・保育者を中心とした交流・連携活動については、公立幼稚園の66.6%、私立幼稚園の26.7%、公営保育所の31.8%、私営保育所の24.4%が行っていることがわかった[5)]。しかし、連携に関する継続的な調査は他に無い。

本研究の対象である小牧市においては、これまでも学校間、園間において温度差はあるものの、幼小連携の実践は進められてきている[6)7)8)]。また、平成14年度より小牧市幼年期教育推進会議が年2回行われ、滑らかな接続への提言や交流・連携活動実施に向けての働きかけがなされている。私立・公立幼稚園、保育所等、小学校を含む市内全ての施設を対象に教育委員会の積極的な働きかけによって行われる合同研修会等の開催、公開保育時の市内の保育者と小学校教師との討議の内容や事例発表等を見ていると、交流・連携活動は年々活発になり進んでいるかのように見える。

そこで本研究では、平成15年度より行っている「幼稚園・保育園・小中学校との交流・連携活動調査」の結果から、6年間の活動の移り変わりを示し、連携に関する今後の課題を明らかにすることを目的とする。

方法

小牧市における「幼稚園・保育園・小中学校との交流・連携活動調査」の結果より、小学校の調査結果を基に本論では、幼保・小間において行われた、幼児・児童を中心とした交流活動と、保育者・教員を中心とした交流・連携活動について考察する。

調査の概要は以下の通りである。

（1）対象：愛知県小牧市内全ての幼稚園11園・保育所18園・小学校16校・中学校9校

（2）期間：2003年12月～2009年1月（年度に1回）

（3）方法：質問紙は筆者が作成し、小牧市教育委員会とデータを共有することとし、調査は教育委員会の主催で行い、調査用紙の回収は郵送またはファックスで行った。

（4）内容：質問紙は記名式で、内容は以下の通りである。

① 幼児、児童生徒を中心とした交流についての有無と、その内容。

② 保育者、教員を中心とした交流・連携活動の有無と、その内容。

③　保護者を中心とした交流・連携活動の有無と、その内容。

④　交流・連携活動のあり方についての自由記述。

結果と考察

（１）幼児、児童を中心とした交流について

平成15年度～平成20年度の市内全体の幼児、児童を中心とした交流回数とその主な内容の内訳をまとめたものが表１である。

表１　幼児、児童を中心とした年度別交流回数と内訳

	回数	授業	行事	体験	その他
平成15年度	37	17	6	10	4
平成16年度	34	13	10	8	3
平成17年度	36	14	9	12	1
平成18年度	32	11	6	12	3
平成19年度	44	16	14	11	3
平成20年度	41	12	15	14	0

調査を開始した平成15年度には幼児、児童を中心とした交流は37回実施されている。平成18年度に32回と最も少なくなるが、翌年には44回と最も多くなった。それは、平成18年度まで校区内に交流できる幼稚園も保育所も無かったところに、保育所が開園したことにより、交流が始まり、全体の回数が増えることにつながった。よって、平成19年度からの全体の回数の増加は特に交流活動が盛んになったという訳ではない。

以上のような結果から、幼児、児童を中心とした交流についての回数は調査開始の平成15年度から平成20年度までの６年間ほとんど変化がないと言えよう。

それでは、平成20年度のそれぞれの内容について詳しくみていきたい。

①　授業における交流

記述されている授業における交流の内容を表２にまとめた。交流の相手は違うが内容が同じものは重複して記入しなかった。

表２からもわかるように、交流の実施時期はほとんどが11月である。季節柄11月は園児・児童が園外や校外に移動するにも暑くも寒くもなく、また雨天の日も少ないことや、教科の単元にも園児を招いての催しをし易いような、「おまつり」や、秋を題材にした「フェスティバル」というような内容のものが含まれ、交流しやすい月であろう。また、年長児にとっては、就学時検診が行われる時期であり、小学校に対する興味や関心も高まる頃である。11月の交流は園児が小学校に期待を持つことのできる良い機会となろう。

表２　授業における交流の内容

時期	内　　容	学　年
10月	３校時の授業を参観し、校内の見学をした。休み時間は児童と遊具等で遊び、昼食は芝生でお弁当を食べてもらった。	幼稚園年長 全学年
11月	授業の参観	保育園年長 １年生
11月	生活科でまつりを行い、お神輿かつぎ等の発表を見てもらい、お店で遊んでもらった。	保育園年長 ２年生
11月	グループ毎に園児とボール遊びやゲームをして遊んだ。また、手紙やプレゼントの交換も行った。	保育園・ 幼稚園年長 ５年生
11月	鍵盤ハーモニカの合奏と歌での交流会。園児を案内しての学校探検。	幼稚園年長 １年生
11月	生活科「校区探検」･国語「おもちゃまつり」で、作ったおもちゃを持って訪問し、一緒に遊んで交流した。施設を見学したり、保育園の先生に質問したりした。	保育園年長 ・年中 ２年生
11月	生活科「あきをたのしく」で、木の実や木の葉で作ったおもちゃの店に園児を招待し、遊んだ。	保育園年長 ・年中 １年生
11月	生活科「秋のフェスティバル」を開催し、作ったものをお店にならべ、いっしょに遊んだ。	保育園年長 ２年生
11月	生活科のフェスティバルに園児を招き、お客さんになってもらい一緒に店をまわったりしながら客と店員という役割で交流した。その後、校内巡りをした。	幼稚園年長 ２年生
２月	ドッジボールやゲームを２時間目に行う。	保育園・ 幼稚園年長 １年生

②　行事における交流

行事における交流は、16校中３校で行っていないと回答があったが、残りの13校で15回行われている。そのうちの10回は運動会における「新入学児のかけっこ」であった。そこでは、担当の委員

会の児童等、高学年の児童と幼児の交流の場となっているようだ。短時間ではあるが、幼児は入場門に集合、整列するところから世話をしてもらい、かけっこの後には参加賞を手渡してもらう等の交流がある。そこで初めて高学年の小学生と接する幼児もあるであろう。小学校の行事に参加し、高学年のやさしさに触れることで、幼児の心の壁は一段下がることにつながるであろう。

③　体験入学における交流

体験入学は14校で１回ずつ行われていた。その時期については、１校を除いて13校全て２月に行われていた。内容は１年生の教室等で、学習の発表を見せてもらったり、１年生と共に校内探検をしたり、歌を歌ったり、折り紙やゲームをするというものであった。

幼児にとって２月に行われる体験入学は、間もなく始まる小学校生活をイメージするのに、大変役立つであろう。また、１年生と共に活動したり、幼稚園や保育園には少ない男性教諭と接すること等、一度でも自分の目で見て、足を踏み入れ体験することで、入学への不安の軽減につながることは間違いないであろうし、モチベーションは高まるであろう。

（２）保育者、教員を中心とした交流・連携活動について

保育者、教員を中心とした交流・連携活動の市内全体の回数と内容の内訳についてまとめたものが表３である。

表３　保育者、教員を中心とした活動回数と内訳

	回数	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ
平成15年度	27	12	4	7	0	3	1	0
平成16年度	31	9	6	7	0	1	5	3
平成17年度	26	7	3	10	0	3	2	1
平成18年度	37	11	4	16	0	3	1	2
平成19年度	53	20	2	26	0	3	1	1
平成20年度	54	25	3	23	0	1	0	2

ア：授業・保育の参観　イ：行事の参観
ウ：連絡会・情報交換会の開催　エ：研修会の開催
オ：行事の計画　カ：広報誌等の交換　キ：その他

調査開始の平成15年度には市内全体で27回行われていた保育者、教員を中心とした交流・連携活動は、平成19年度･20年度にはおよそ２倍の53回･54回と回数が増えている。その内容を見てみると、平成15年度・16年度には ア 授業・保育の参観が最も多く、次いで ウ 連絡会･情報交換会の開催、イ 行事の参観 と続くが、平成17年度以降、ウ 連絡会･情報交換会の開催 が最も多くなり、次にア 授業･保育の参観、イ 行事の参観と続く。それでは、次にこれらア～ウの内容の回数の変化について詳しくみてみたい。

①　ア　授業・保育の参観について

平成17年度に７回と最も少なくなるが、平成20年度には25回と最も多くなっている。

平成20年度の内容を見てみると、授業・保育の参観は16校中12校において行われているが、その内、保育者が授業を参観した学校が４校、教員が保育を参観した学校が３校、両方行った学校が５校であった。（表４）

表４　平成20年度の参観の内訳回数

	学校数
保育者が授業を参観	4
教員が保育を参観	3
両方	5

また、保育者による授業参観のみ、教員の保育参観のみの学校については、それぞれ１回ずつであるが、両方行った学校については、複数回の参観を行っていることがわかった。

感想を記述する欄には、授業参観のみ行った学校では、ほとんど感想が書かれておらず、園側より、参観の機会を増やして欲しいという要望が出されたことが記されているのみであった。しかし、（教員が保育を参観する）保育参観のみ、または（教員が保育を参観し、保育者が授業を参観する）両方行った学校の感想からは、保育を参観することで得られる多くのことや、今後の指導に役立つと言った記述が目立った。また、お互いの参観の機会を増やすことで指導上のつながり（連続性）も生まれるのではないかという記述もあった。

これらの記述からもわかるように、保育者による授業の参観のみを行っている学校では、それを行うことによる意義を感じることができずにいるようであるが、教員が保育のみを参観する場合であっても得るところは大きいようであるし、ましてや両方行っている学校においては、参観による互恵性を感じ、また互いに参観する必要性も大いに感じているようである。

② イ　行事の参観について

行事の参観回数については、最も少ない年で２回、多い年で６回と全体に少なく、年度による変化があまり見られない。

行事の内容を見てみると、学習発表会、運動会、学校公開、異学年交流会等であるが、小学校側から園の行事に参加するものは運動会のみであり、その他は全て保育者が学校行事を参観していることがわかった。

教員にとって行事の参観は保育の参観と違い、容易である。なぜなら、環境を通して好きな遊びの中で展開されていく保育は、チャイムとチャイムで区切られた時間の中で行う学校の授業とは大きく違い、教員にとっては参観のポイントが難しい。行事はハレの日であり、幼児の日常ではなく、少し頑張っている姿ではあるが、その様子を見ることも教員にとっては有意義であろう。そういう意味では、幼稚園・保育所は教員への行事の参加を今以上に促す必要があろう。

③ ウ　連絡会・情報交換会の開催について

調査開始の平成15年度の連絡会・情報交換会の回数は６校７回であったが、平成20年度にはその約３倍の23回行われており、市内16校全校で１～４回行われている。11校で１回、４校で２回、１校で４回行われた。（表５）

表５　連絡会・情報交換会の１校当たりの回数

回　　数	学　校　数
１回	11
２回	4
３回	0
４回	1

開催時期をみてみると、６月が５回と最も多くなっており、次いで１月に４回と続いている。

表６　連絡会・情報交換会の月別開催数

月	学校数	月	学校数
４月	0	10月	3
５月	1	11月	0
６月	5	12月	1
７月	3	１月	4
８月	1	２月	3
９月	1	３月	1

（表６）開催時期が決まっていないので、集計にカウントはしていないが、特に日にちを設けたもの以外に随時行っているという回答もあった。

2006年の情報交換についての調査[9]で小学校の教員が希望する情報交換会開催時期は、10月と２月が最も多かったが、保育者は６月と12月であった。今回の６月が最も多いということは、保育者の希望に近づいた結果となったということが言えよう。

このように、連絡会・情報交換会の回数の増加の背景には前にも述べたように、教育委員会の開催する合同研修会や公開保育の後の懇談会等、保育者と教員が直接顔を合わせ、話し合う機会が年に数回ある。年を追うごとに顔見知りが増え、保育者と教員の間にある垣根が低くなっていることで、相手に連絡会・情報交換会の申し入れがし易くなっているのではないだろうか。

まとめ

小牧市における６年間の「幼稚園・保育園・小中学校との交流・連携活動調査」の結果から、小学校の調査結果を基に幼保・小間において行われた、幼児･児童を中心とした交流活動と、保育者･教員を中心とした交流・連携活動について考察してきた。

幼児・児童を中心とした交流活動の回数はこの６年間、ほとんど変化をしていないが、保育者・教員を中心とした交流・連携活動の回数は、調査開始時の約２倍になっている。保育・授業の参観をすることで、互いの保育・教育の内容を知ることができる。それは直接、目の前の子どもの教育や保育に関わってくる[10]。また、連絡会･情報交換会においては調査開始時の約３倍行われており、回数が増えたことは、大変望ましいことであろ

う。小牧市は教育委員会の積極的な働きかけにより、他市に先駆け、幼保・小の連携に関する取り組みが行われている[11)12)]。また、それぞれの学校独自の取り組みも継続的に行われている。その結果が連絡会・情報交換会の回数の増加につながったのだろうが、それが単に学級編成のための一資料として終わってしまっては意味が無い。

本市においては、布谷[13)]の言う「連絡調整型」「交流実践型」「合同研修型」連携は、ほぼ行われている。今後は、具体的な実践を幼保･小の保育者、教師が一緒になって観察し、検討しあうような「実践カンファレンス型」連携にまで進め、カリキュラムの開発の連携を目指す必要があろう。連携が一人一人の子どもの滑らかな移行へと直接かかわる内容であるかどうかが問題である。

本論では、小牧市における交流・連携活動の取り組みの移り変わりを、その回数の推移でみてきたが、今後は連携の内容について言及する必要があろう。

謝辞

本研究にご協力くださった、小牧市教育長副島孝先生、教育委員会指導主事神戸和敏先生、お二人の元指導主事舟橋尚女先生、前田泉先生、ならびに調査に協力してくださった先生方に心から感謝申し上げます。

引用・参考文献

1）教育基本法　第11条
2）学校教育法　第１章　総則
3）文部科学省　2008『幼稚園教育要領』
4）椋田善之　2009「幼児教育と小学校教育の接続および連携に関する研究動向―日本保育学会における発表論文（1985～2007）を中心に―」摂南大学教育学研究　Vol.5　PP.57-63
5）後藤憲子編　2009「第１回 幼児教育・保育についての基本調査報告書（幼稚園編・保育所編）」ベネッセ次世代育成研究所報　VOL.4
6）横井志保　2004「幼･保小の連携における一考察―小牧市立K小学校のある取り組みから―」一宮女子短期大学紀要　第43集　PP.27-33
7）横井志保　2007「幼保･小の連携における情報交換会の持ち方とその課題－愛知県K市の調査を中心に －」愛知教育大学幼児教育研究　PP.55-60
8）横井志保　2006「幼保･小の連携に関する研究　―保育理解のための公開保育について―」一宮女子短期大学紀要　第45集　PP.203-208
9）前掲書７）
10）前掲書７）
11）2007.10「幼保小中の連携について」尾張部都市教育長会議資料
12）庄司裕志、野田敦敬　2009「幼小連携の取り組みについての一考察」愛知教育大学教育実践総合センター紀要　第12号　PP.221-228
13）布谷光俊　2008「新・教育課程でさらに求められた「幼・小の円滑な接続」と「幼・小連携」―これまでの答申等に見るこれからの扱いの変遷と連携のかたちを考える―」愛知教育大学生活科・総合的学習研究　PP.1-10

Study on Desirable Relation of Early Childhood and Primary Education Ⅲ

― From Investigation of Interchanges / Cooperative Activities of Six Years in KOMAKI city ―

Yokoi, Shiho*

小牧市では、平成14年度より小牧市幼年期教育推進会議が年２回開催され、滑らかな接続への提言や交流･連携活動実施に向けての働きかけがなされている。その結果、交流・連携活動は年々活発になっているかのように見える。

そこで本研究では、平成15年度より毎年行っている「幼稚園・保育園・小中学校との交流・連携活動調査」の結果から、６年間の活動の回数の推移と内容の変化を明らかにした。その結果、幼児と児童を中心とした交流の回数は６年間ほとんど変化がなかったが、保育者と教師を中心とした交流・連携活動はおよそ２倍となっていた。中でも、連絡会・情報交換会の開催は約３倍になっていることがわかったが、今後は、回数を増やすことではなく、連絡会・情報交換会が、一人一人の子どもの滑らかな移行へと直接かかわる内容であるかどうかが問題であり、具体的な実践を幼保・小の保育者、教師が一緒になって観察し、検討しあうような連携にまで進め、カリキュラムの開発の連携等に進めることが課題として明らかになった。

キーワード：幼保・小の連携，活動調査，交流会，情報交換会

**Nagoya Ryujo (St. Mary's) College*